



有り思ったよりも快適な登山でした。人数が多いためキレットなどで待ち時間があり予定より 30 分遅れて 11 時 30 分到着しました。

昼食後 12 時に出発し国見峠まで下り国見岳には 1 時間で 13 時に到着しました。ガスの晴れ間から正面には登って来た中道の尾根や御在所岳が見えます。又手前の尾根には天狗岩などが見え素晴らしい景観です。ここは国見尾根の縦走道でこの岩の横を下山します。登山道が大きく掘れ荒れていて厳しい下山と成りました。中道や裏道と違い国見尾根は登山者にも出会いませんでした。河川も大きな岩で埋まっています。豪雨の傷跡が残っています。川の岩の中を歩き藤内小屋に着きました。小屋は綺麗に再建されていました。小屋の前の冷たい水で顔を洗って厳しい下山道を無事に降りて来られてホッとしました。裏道登山口には予定より 1 時間遅く 16 時 40 分下山しました。荒れた厳しい国見尾根の下山道でしたが全員事故なく無事に下山出来ました。

下山後佐坂山行部長から本番の夏山登山八ヶ岳に全員参加 OK の許可が出ました。6 月から始めたトレーニング登山も無事今回で終了しました。

佐坂山行部長 SL の大谷さん班長の秋月さん赤松さんご協力有り難う御座いました。  
ひやりハット ありません



## 感想文

### ‘八ヶ岳’ に向けての最終訓練登山を終えて

倉光 展子

御在所岳に登って来た。夏山集中登山に向けて 4 回の訓練登山が行われたが、その最終である。私は最近何かと予定が入って、なんとか 2 回参加できた。この季節、本当に暑く、今年巷では熱中症とか、熱中病の言葉がよく聞かれる。中国語でも‘悶熱(メンラ)’という言葉があるが、この‘悶えるような暑さ’の時期の里山訓練登山は、本当に厳しいものがあり、本番よりもつらい、と言うのが相場のようなのである。

冒頭に、「予定があって 2 回やっと参加できた」なんて書いて、これまた自分勝手な、不謹慎な言葉を並べてしまったが、正直、私の最近の登山に対する姿勢は、若い人の流行り言葉を借りれば、「ビミョウ」である。以前のように登山一筋というわけにはいかない。いや、私の言葉には‘一筋’なんて言葉はない。おこがましくて使えない。いつも細い線が幾筋かある、気の多い人間である。しかし、最近その‘筋’が妙に増えて来た。職業という社会的責任が無くなって、気儘放題が許されることも大きい。人生のリミットを痛感して、少々焦りがある。親族、友人、知人、身近に感じてきた有名人等の死亡に触れる度、寂しく思うと同時に、我に帰ると、「‘その前に’、あれもしなくちゃ、これもしたい」とむらむらと欲望というか、要求が湧いてくる。そ

の多くは人々の一笑に晒されて終わるようなことである。それらに手をつけてはみたものの、中途半端になってしまい、なんとかしなければと焦ることが多い日々である。「老人はみんな‘黄昏時’を安穩と過ごしているわけではないのです。特に‘おくて’は大変なんです、はい。」そんなわけで登山の回数も激減している。

さて、登山に戻ると、登山はやっぱり面白い。登る前の緊張感、不安感がいい（終わってから言えることかな）。これが、登ることができた時の喜びを倍増してくれる。うかうかしていると、いつの間にか急降下しているかもしれない体力を信じて、登山に挑む老人にとってはなおさらだ。下界をいくら歩いていても山の上とは違う。家の近くの甘南備山にたまに登る。大方は大きな山に登る前のわか訓練なのだが。登る時はまるで比叡山の千日回峰の苦行僧のように、黙々と、ただひたすらに、息を荒げて大股で速度をあげて歩く。それでも安心できない。大きな山にはどんな魔物が潜んでいて、脚を引っ張るかわからない。終わってみると、大抵は、何だ、そんなに心配することはなかったな、と思うのだが・・・

次に、頂上に向かっての登りだ。これも今のところなんとかやれている。よく山に登っている途中に、下品な(?) 会話をする。今回も「1万円もらえるなら、ここから麓に降りて又登って来るか?」と。みんなは「1万円ぐらいで、そんなことできない」と言った。私は「行ってきてもいいよ」と意気揚々と答えた。しかし、これは疲労度を試しているのか、金銭慾を試しているのか、分からないなと気づくと、自分の返答が恥ずかしくなった。私が最盛期の頃、軽やかに動く登山靴を見て、赤いバレーシューズの話を思い浮かべた。少女が赤いバレー靴を履くと、足が軽快に動いて、踊りをやめたくても止められないという話である。私のこの登山靴も魔法のかかったすごい靴と錯覚したほど、そんなに強くない私でも軽やかに楽しく歩けた。今はそんな幼稚な空想物語はない。年々体力の下り坂を転がっているのだろうが、山友会に入会する前と比べると、歳はとっても、今の方がましだと思うから、続けている。

御在所岳では、岩場に来ると、山行部長の佐坂さんが待ち構えていて、ストックをしまえ、三点確保、足をここにおいて、後ろ向きに降りて等、一人一人に丁寧な指導を下さっていた。岩場が好きな私の下り方は、危険と注意された。

今、私にとって、下山が課題である。「事故が起こるのは下山時だ。ゆっくり、慎重に」の安全山行の呼びかけが、私にはよく効き過ぎて、滑って転んだり、つまずいたりするのを極度に恐れて、滑りそうな地面の色を見ただけで身構えてしまう。今回も御在所岳の頂上から国見岳を回っての下山は、数年前の大水のせい、急勾配の尾根はあんなものなのか、土が流され、木々の根っこや岩が露わに出ていた。荒々しい急勾配を緊張して降りた。

山友会在籍14年、健康体だったら誰でも登山ぐらいはできるだろう、と無知なおごりと失敗から始まった登山歴。よくもこんなに多くの厳しい山に登れたものだと、振り返ってみて驚く。本当に山友会にめぐり合えた幸運に感謝している。不安→成就→自信を繰り返していくうちに、体力もつき、更に、さらに深遠な自然に触れることができた。

骨身、時間を惜しみなく貢献して下さった代々の会のリーダーたちには心からお礼を申し上げる。中でも、私たちの世代は、山口さんや佐々木さんに負うところが大変大きい。彼らによって、一部のエリート登山者が登る山と思われていた山を、私たちでも登れる山にしてもらった。ゆっくり、丁寧に、着実にリードして下さるやり方は、多くの人々の夢を次々に実現させた。山口さんは今年、八ヶ岳夏山登山、訓練登山の企画の実行委員リーダーとして、活躍された。そして今回、御在所岳登山も、78歳の巨人は先頭を着実なペースでリードして下さった。

御在所山から下山して、麓の籐内小屋に着いた時、いつもより汗びっしょりのシャツにさわやかな風を受け、事の他爽快に感じた。この歳になって、生身の体を張って、大きな自然に対峙できる経験は、登山以外に出来ないだろうなあとしみじみ思った。(終)



御在所岳の岩場 梅沢氏撮影